【Radius 21】

Radius（ラジウス）社は、Primus 社から独立を試みた従業員達によって興されたスエーデンの会社である。Radius とは、創業者の名ではなく、「光線、放射線」を意味するラテン語であり、トレードマークのシューティングスターからもその意味がとれる。おそらく、「流れ星のように輝き、早く Primus を追い越そう。」という起業家たちの思いが込められていたのではなかろうか。

Radius 社は、国内にひしめく Primus、Optimus、Svea といった先発メーカーとの競争に活路を見出すため、その矛先を海外に向け新しい市場の開拓を図っていく。最盛期には、全生産量の９０％が輸出されるようになったらしいが、そのもっとも顕著な成功例は日本であるといえよう。日本では、戦前から輸入されており、Primus のそれを凌いでいた。そのため、日本のクライマーの多くが携帯用山岳ストーブといえば Radius を連想し、さらには、「Radius はメーカー名ではなくて山岳ストーブ全体の総称」と思わせるほど、この類の代名詞として定着した（現に小暮会長も灯油ストーブの総称と思っていたようだ）。新田次郎や井上靖の小説でもそのように書かれているのだから無理もない。

また、Radius 社は、先発メーカーに対抗するために、製品の高品質化と技術革新に力を入れ、クリーニングニードルの内蔵化や安全弁などの新機能をいくつも発明し、登山家たちの信頼を得ていった。

第２次世界大戦後、しばらくの間は事業を拡大し、生産品目は、ランタン、ヒータ、ブロートーチ、自動車用ギア･ボックス、釣用のリールと多岐に及んだが、1963 年、商標権をライバルである Optimus 社に譲渡し 50 年の歴史に幕を閉じた。

その後、Optimus 社は、自国のシェアが低かった Radius ブランド用いることはなかった。Optimus が欲しかったのは、Radius が有する高い技術力＝特許だったのか、そんな推測も出来る。

さて、この固体は、1961 年生まれである。コールマンやプリムスのように、製造年月を製品本体には刻印しないが、出荷時、取扱説明書に検査確認済の印が押されそこに検査日が記載されるので、誕生日が特定できる（取説をなくしたら分からない）。

最近これを山に連れて行ったのは、吉田君、栗原さん、ミハエラさん他と山田杯の下見に上州武尊へ行ったとき（2004 年）だからもう２年前になる。このときは、タバコを嗜むにもかかわらずライターを忘れてしまったので、残念ながら点火することが出来なかった。

もっと頻繁に使いたいのだが、操作方法は Primus54 と同じく、手なずけるには熟練と慣れが必要で、そう簡単に遊び相手になってくれない。また、調節便の働きをよく理解し、高度を上げていくことによる周辺気圧の変化でどんな影響が出るかを知っておかないと、燃料が吹き出したりこぼれたりするので、注意が必要である。

このストーブは、ばらばらに分解すると、思ったよりも小さな収納缶に収まる。タンク容量もそこそこあるので、３～４人パーティにちょうど良いサイズとされる。ガスストーブが普及するまでの間、ホワイトガソリンより遥かに安価な灯油が使えるストーブは、特に貧乏学生の間で人気があったようだ。

私は、この種の灯油ストーブを山で見かけたことはなかったが、２年前の冬、土合の駅で東京の大学生のパーティが日本のマナスル 121 を使用している現場に遭遇することが出来た。お通夜のように静かな空気の中で、マナスルだけがゴーゴーと元気よく音を立てて燃えていたのが記憶に新しい。